道子の朝

砂田　弘

偕成社文庫 4011

道子の朝

砂田　弘

偕成社文庫
4011

著者　砂田　弘（すなだひろし）

1933年朝鮮に生まれる。早稲田大学仏文科卒業。出版社に勤務後、文筆生活に入る。著書に「さらばハイウェイ」「六年生のカレンダー」「東京のサンタクロース」などがある。日本児童文学者協会会員。住所／千葉市松波 2-5-12

偕成社文庫　4011　　中学以上向

道　子　の　朝

NDC 913　260p　18cm

1976年 4 月　1 刷
1981年 5 月　4 刷

著者　砂田　弘
東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5
発行者　今村　廣
東京都板橋区栄町23
印刷所　新興印刷製本株式会社

発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5
振替・東京5-1352番　〒162

©Hiroshi Sunada 1968 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　ISBN4-03-850117-5

道子の朝

砂田　弘

偕成社文庫 4011

偕成社文庫

定価480円

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

著者　砂田　弘（すなだひろし）

1933年朝鮮に生まれる。早稲田大学仏文科卒業。出版社に勤務後、文筆生活に入る。著書に「さらばハイウェイ」「六年生のカレンダー」「東京のサンタクロース」などがある。日本児童文学者協会会員。住所／千葉市松波 2-5-12

偕成社文庫　4011　　中学以上向

道　子　の　朝

NDC 913　260p　18cm

1976年 4 月　1 刷
1981年 5 月　4 刷

著者　砂田　弘
東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5
発行者　今村　廣
東京都板橋区栄町23
印刷所　新興印刷製本株式会社

発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5
振替・東京5-1352番　〒162

©Hiroshi Sunada 1968 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-03-850117-5

道子の朝

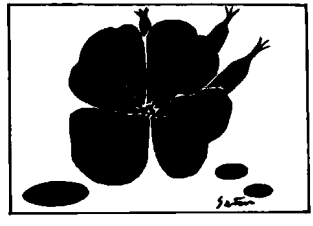
砂田　弘

偕成社文庫
4011

もくじ

第一章　平和の日び……7
　少女たち／父／母／シチューの味
第二章　とつぜんのあらし……28
　入院／王さまの耳はロバの耳／病室／三人姉妹／ガンセンター
第三章　父と母の青春……53
　一年の命／戦友の妹／課長室／すばらしい日曜日／焼け跡の中の青春
第四章　父と娘……82
　母の退院／津軽海峡／雨の夕張／七夕の町／すわりこむ主婦
第五章　三池の歌声……111
　なつかしい友／ヤマの二十年／赤いはちまき／勝ちか負けか
第六章　夏から秋へ……135
　海／電話ボックス／ツクツクシ／夏のおわり
第七章　命とはなにか……157
　日本のガン／結婚記念日／生きるよろこび／人間の命

第一章　平和の日び



少女たち

きょうこのごろの毎日の、なんと似かよっていることだろう。とりたててしるすほどの出来事もおこらない。それが平和のあかしだとすれば、平和とはなんとたいくつなものだろう。

秋山道子の一家の場合も、そうであった。両親と三人の娘たちは、ほぼ似かよった毎日をくりかえしていた。ちょうど、きのうもきょうも、電車がおなじレールの上をゆききするように。

たとえば、四月末のある土曜日の午後――。

道子は、友だち三人と、大通りのかどにあるおしるこ屋で、あんみつをたべていた。四人は、中学二年生、あまいものに目がない年ごろであった。そし

てまた、おしゃべりが大すきな年ごろでもあった。

だが少女たちは、めずらしくだまって、スプーンの手をうごかしていた。正面のカラーテレビにむちゅうだったのである。画面では、いま、わかい女性歌手が、ギターをかきならしながら、おなじみのフォークソング「ドンナ・ドンナ」をうたっているところだった。

「すばらしいわね。」

さいしょにあんみつをたいらげた南郁代が、ハンカチで口をぬぐうといった。ほかの三人は、とっさにうなずきかえした。しかし、少女たちは、歌をほめたたえたのではなかった。彼女たちの心をひいたのは、歌よりもむしろ、歌手のみごとなスタイルであった。

白い丸首のセーターと、えんじ色のミニスカート、肩にたらしたゆたかな黒い髪と、すんなりとかたちよくのびた小麦色の足。そしてブルー一色のバック。五つの色が、画面いっぱいに美しい構図をえがきだしていた。

「わたし、ミニスカートつくったのよ。」

と、また郁代が、すこしとくいそうにいった。すると、めがねをかけた小がらな矢野恭子が、さくらんぼうをようじでさしながら、肩をすくめた。

「わたしもよ。おもいきって、ひざ上十センチにしたの。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

カラー放送がおわり、テレビの画面は黒白となって、スポーツカーのコマーシャルがはじまった。店のおばさんが、ふみ台にのって、テレビをけした。

道子たちは、すくなくとも週に一どは、学校の帰りにこの店にたちよって、あんみつやおしるこをたべる。そしてみじかいときでも三十分、ながいときは一時間以上も、小鳥のようにしゃべりまくる。だから、店がこんでいるときなどは、あまりありがたくないお客であった。

この日は、土曜日。この小さな店の五つのテーブルは満員だった。テレビをけしたおばさんは、つぎに四人がかこんだテーブルの上を、ていねいにふきはじめた。しかし、そんなことでおみこしをあげる少女たちではなかった。

「きのうの晩、野村先生が女の人と歩いているのを見ちゃった。」

あたらしい話題をきりだしたのは、津川まゆみだった。まゆみは、片ひじをテーブルの上にのせると、トレードマークの大きな目をくりくりうごかしてつづけた。

「おふろの帰りに、四つかどで出会ったの。先生ったら、はずかしそうに目をふせたわ。」

だれもなにもいわない。まゆみは、あいかわらず目をくりくりさせながら、三人の顔を見わたした。

どこの中学校にも、女生徒に人気のある男の先生がいるものだ。わかくて、ハンサムで、独

身、すこしきりとしたところがあって、しかも授業がおもしろい。道子たちに社会をおしえている野村先生も、その条件にかなったひとりだった。

「先生の家は、たしか下町でしょう。だからきっと、デートのあとで、恋人を家までおくっていったのね。」

いつのまにか、語り手も聞き手たちも、テーブルの上でほおづえをついていた。ややしばらくして、恭子があかるい声でいった。

「いいじゃないの。野村先生に恋人がいようが、フィアンセがいようが、かまわないじゃない。いてあたりまえよ。」

「だけど、ちょっとショックね。」

と、おかっぱの髪をなでながら、郁代がとなりの道子をふりむいた。

「チコなんか、しゅんとしちゃったわ。」

話題がかわってから、道子はこわばった表情をしていた。恭子もまゆみも、ちらりと道子の顔をぬすみ見た。道子はきゅうに、顔がほてるのを感じた。

中学も二年生になると、異性にたいしていろいろと関心を持つようになる。恋愛や結婚をゆめみることも、めずらしくない。いつだったか、やはりこの四人で、それぞれすきな男性のタ

イブを話しあったことがあった。ほかの三人は、映画やテレビにでるスターの名をあげたが、道子は野村先生の名をあげた。いまでも、その気持ちはかわっていない。

「きれいな人だった？」

ひざの上にかかえたかばんを、胸の前にひきよせると、やっとの思いで、道子はきいた。道子はすらりと背が高い。立てたひざが、テーブルのはしにあたって、テーブルが小さくゆれた。一ど二ど、まゆみは首をかしげた。

「顔はよく見えなかったけど、背が高くて、白いコートをきて、そう、厚い本を小わきにかかえていたわ。大学生かもしれない。」

目をとじると、夜ふけの町を、野村先生が美しい女子学生と肩をよせあって歩いているすがたが、目にうかんだ。道子は、うらやましいような、腹だたしいような気持ちにかられた。

それにしても、わたしはなぜ、野村先生がすきなのだろう。するとふと、道子は父の二郎のことを思いだした。父と野村先生とは、どことなく似たところがあった。そうだったのか。道子のはりつめた気持ちは、しだいにやわらいできた。

「じゃ、おにあいのカップルってわけね。」

ほほえみながら、道子はいった。そこには、くったくのない、いつもの道子の笑顔があった。

父

秋山二郎は、新宿のさかり場で、パチンコをはじいていた。

道子が週に一どは、おしるこ屋に立ちよるように、父の二郎も、週に一どはパチンコ屋をのぞく習慣があった。そしてたいてい、それはなにか不ゆかいな出来事があった日にかぎられていた。

二郎は、四十二歳、むかし流にいえば、男の厄年である。産業省につとめて十四年、三年前にやっと鉱山局の係長になった。

ところでこの日、二郎は上司の島崎課長によびつけられ、仕事の予定がおくれているということで、きつくしかられた。二郎の係りではいま、昨年鉱山でおきた事故の統計表をつくっていたが、それがおくれているというのだった。

「しかし、しめきりは、たしか来週の火曜日だったはずです。」

二郎は、課長のつくえの前に立ちつくしたままいった。

「きみ、しめきりというのはいわばゴールだよ。ゴールのテープは、いつ切ってもいいんだ。

早ければ、早いほどいい。」

パイプをくゆらせながら、二郎をきっとにらんだ課長のめがねのおくの目を、かれは思いだした。その記憶をうちけすために、二郎はパチンコの早打ちをはじめた。

店内をいせいよくながれていた「軍艦マーチ」が、テンポのゆるいどことなくものがなしい「同期の桜」のレコードにかわった。しかし、不ゆかいなときは、なにをやってもうまくいかないものだ。玉はくぎをはねては落ちていき、二郎はたちまち、二百円すり、三百円すった。

「秋山さん、やってますね。」

うしろできおぼえのある声がした。ふりむくと、部下の馬場青年が立っていた。二郎は、てれくさそうにわらった。

「きみも、やるのかい。」

「ぼくは、こんな子どものあそびみたいなものはやりません。だけど秋山さんはおすきですね。」

馬場青年は、たばこをくわえると、ダンヒルのライターで火をつけた。一本のたばこが灰にならないうちに、二郎の受けざらの玉はなくなった。馬場青年がいった。

「課長に大目玉をくらったそうですね。ぼくらの責任です。秋山さんはなにもいわないから、かえって責任を感じます。だから、役所がひけてから、そっとあとをつけてきたんです。」

「なんだ、尾行してきたのか。」
二郎は苦笑した。かれはこの青年が、なんとなくすきだった。べつに有能でもないし、おしゃれで、レジャーにむちゅうの、ありふれた現代の青年のひとりにすぎない。だが、人なつこいその性格が、二郎はすきだった。
「お茶でものむか。」
「ぼくは、ビールをぐいっとやりたいんですが、秋山さんはあまりのみませんからね。お茶でがまんしますか。」
二郎を係長とよばないで、名でよぶところも、二郎がこの青年がすきな理由の一つだった。ふたりは、美空ひばりの歌謡曲におくられて、パチンコ屋をでた。
駅ビルの地下の喫茶店で、ようやく空席を見つけだすと、ふたりは、ネクタイをゆるめた。初夏を思わすような、むし暑い午後だった。
「友だち三人といっしょに、ヨットを買ったんです。夏休みに、おじょうさんたちといっしょに、のりにいらっしゃいませんか。」
「ほう、太平洋の横断でもやらかすのかい。」
馬場青年は、手入れのゆきとどいた髪の毛をなでつけると、白い歯を見せてわらった。背広

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb